

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻修士論文要旨

崇高と／のアイステーシス

——リオタール『崇高の分析論講義集』について——

哲学専修 小 菊 裕 之

本論は、ポスト・モダンの哲学者として知られるJ・F・リオタール（一九二四―一九九八）の思想について、彼の晩年の主著の一つである『崇高の分析論講義集』（Galilee, 1991, 未訳）を中心に、とりわけ崇高、及び、アイステーシスというタームに着目しながら、その議論を批判的に検討することを差し当たりの目標としている。上記著作の中でリオタールは、I・カント（一七二四―一八〇四）の『判断力批判』（一七九〇）を詳細に読解し、感情や崇高という概念がその著作内に占める特異な位置づけをつぶさに明らかにしており、この一連の解釈が、一九八〇年代に精力的に取り組まれた彼の崇高や芸術に関するテクストの源泉となつていふと考えられる。ところが、これまで、そうしたリオタールの芸術ないしは崇高に関わるテクストの多くが議論や混乱を招いてきた。例えば一九八三年に行われた講演「崇高と前衛」などに代表される、崇高と前衛芸術に関するテクストの中で、彼は、カントをはじめとする近代の崇高概念を前衛芸術に適用し、すべてのものを流通／消費可能にする市場経済的な文化への抵抗として、現代の前衛たちの作品を位置づけている。その是非を巡ってこれま

でいくつかの視点から批判ないしは擁護が行われてきた。また同じく、カントの上記著作内で言われている、自然や芸術を前にした際に感じる「快の感情」を間主観的な判断の基準として、厳密な理論的判断からは離れた、例えば政治的な判断へと適用することに対して、リオタールはそれを断固として否認し続けており、そのことがこれまで少なからぬ誤解や論争を呼んできた。そうした点も踏まえて、本論では、そうした議論においてはこれまで言及されることがほとんどなかったリオタールのカント解釈について立ち入った検討を行い、その論理の問題点を指摘したうえで、上のようなさまざまな議論の争点を明確にすることをまたその目的としている。そうした訳で、リオタールのカント『判断力批判』解釈を再検討する本論の構成は以下のようなものとなる。第1章では、われわれが一般に美や崇高と呼ぶような、特定の対象への美感的判断に伴う純粹な感情の、認識以前という特徴を、そして、その感情が対象触発と同時に自己触発を起こすという構造を確認する。第2章では、とりわけ崇高において現れる、対象の無形式性をきっかけとした、われわれの心の葛藤分裂状態を確認し、その逆説的な仕組みを検証する。このように、カントを解釈するリオタールの一連の叙述を追うことで、彼の崇高にまつわるテクストが持つ射程を明らかにできるだろう。

看護における言葉の意味

——メルロ＝ポンティの言語論をとおして——

哲学専修 中西 千ヨキ

私は、応用人間研究科において、「看護における語る」と聴くことについて研究した。そこで見いだした「言語の起源としての所作」「あらたな意味を創造する語る言葉」「経験の捉えなおし」「過去の時間そのものを聞く」「語る者と聴く者のあいだの生命的力」「聴く者の知覚」という6つのテーマは、全体として見ると一つの新たな意味の世界を創造する「構造」として捉えられた。本論文では、語ることの構造をメルロ＝ポンティの言語論に依拠して分析し、看護における一つの方法を見いだす手がかりを得ることを目的とした。

言葉の起源は人間と感性的世界とのあいだのある関係を指示する所作と、感性的世界を観察する「自然的知覚」、所与としての世界に人間による世界の重層を可能にする情動的活動にあった。言語は主体が意味の世界のなかでとる位置のとり方そのものを表し、言語的所作としての身体能力によって経験の一つの構造化、実存のある一つの転調を実現するものであった。制度化された言葉ではなく、意味が発生状態で見いだせる語る言葉は真の言葉として人間の最も深い本質をなす生産性を表し、ある意味を捉えると同時に伝えるところの「意味する」という開かれた無限定の力を持ち、究極的事実として認められた。語ることは、現在の自己を超えて過去と未来へおもむき、実際に経験した過去のあるがままの場所における知覚経験そのものに触れ、現象としての自己を自己自身へ構成した。現実生きてきた事実は時間経過のなかでいつでも捉えなおされ、獲得された思考は次元のかたちでいつでも現前し、生きのびる力を持つ。言葉は経験としての沈黙のコギトを前提とし、表現されることによって真のコ

ギトになるのであった。

この構造現象の出現は、メルロ＝ポンティが言うように、「あらかじめある一つの理性が外部に展開するということではない。△形態▽としての世界の出現そのものであって、その出現の可能性の条件ではない。一つの規範の誕生そのものであって、「あらかじめある」一つの規範にしたがって表現されてゆくものではない。これを看護に置き換えると、看護を必要としている人の言葉は、客観的な諸々の性格の総体ではなくて、世界の把握の或る種の様相、要するに一つに還元し得ない構造を表し、構成された言葉として概念的に捉えることを拒むものであった。看護を必要としている人の健康や病いを生きる自然的生活そのものの意味の世界の表現は、判断するのではなく、この構造を△了解する▽ことを要求するもので、ここに看護の出発点があり、終局点があると考えられた。そこで見いだされるのは、看護を必要としている人の言葉の根源的な意味としての「健康や病いについて新たな意味を創造すること」と「それをわがものすること」、であった。そこにこそ看護を必要としている人にとっても看護師にとっても大きな安らぎが得られると同時に、新たな人生が開かれるのであった。看護における語る」と聴くことは現象学的世界であって、看護を必要としている人と看護師との経験の絡み合う相互主観性ときり離なすことのできないものであった。ここには看護の一つの方法があると言えないだろうか。

困難やゆきづまりを契機とした教員の力量形成

——中学校教員の事例から——

教育人間学専修 福岡 智史

本研究は、教員の力量形成を、教育実践上の「困難やゆきづまりを感じた出来事」とそれを経験した教員の意識と行動から考察する試みである。

第1章では、教員の成長と危機に関する先行諸研究のレビューを行った。ここでは、各研究の意義と方法論を検討し、本研究との相違を明確にすることで、本研究の視点と方法の意義を主張した。

第2章では、教員に影響を与える今日的・恒常的教育の変化と「日本の教員文化」の特徴である「再帰性」「不確実性」「無境界性」を根拠とした「困難やゆきづまりを感じた出来事」を通じた教員の力量形成の可能性を指摘した。その一方で「困難やゆきづまりを感じた出来事」が疲弊を抱える教員の増加を加速させていることを踏まえ、「困難やゆきづまりを感じた出来事」を前向きな実践への取り組みへとつなげ、力量形成を支えるための存在の必要性を指摘した。

こうした主張をもとに、第3章では、自由記述式質問紙を用い、21名の教員から「困難やゆきづまりを感じた出来事」を経験することによる教員一人ひとりの意識と行動の変化を探った。そこからは、教員の力量形成の中にある「契機」「過程」「表出」をより具体的に表した「困難やゆきづまりを感じた出来事」・「困難やゆきづまりを感じた出来事への対応」・「困難やゆきづまりを感じた出来事からの実践への影響」・「困難やゆきづまりを感じた出来事に対する教員の意識」という時間軸に沿った「4つの力量形成のポイント」を導き出した。その「4つの力量形成のポイント」から教員一人ひとりの意識と行動の変化を詳細に示すことができた。

第4章では、第2章の指摘と第3章での結果を受けて、「反省」と「省察」、「探求」と「創造」による「困難やゆきづまりを感じた出来事」を通じた教員の力量形成のあり方を明らかにした。さらに、力量形成の「過程」の中に「どこかで何か（誰か）」とつながっている感覚」が多様な形ではあるが、共通して伺えることに着目し、この感覚が実践の是非に関わるだけでなく、実践への前向きな姿勢と力量の形成を支えるものとして教員の意識と行動の変化をもたらす重要な要素となることが明らかになった。

今後の課題としては、「どこかで何か（誰か）」とつながっている感覚」の質に迫る研究と、より有効なつながりができる場づくりの方策の検討が必要だと考える。また、一人ひとりの教員の全体性を捉えるための継続的研究と信憑性の向上のための調査対象者を増やした研究の双方からの接近が求められる。

自分という存在とその意識に関する一考察

きと考える。

教育人間学専修 山中 望友紀

本研究では、自分という存在の意味を問い直すことで、自分自身に起こる変化をありのまま綴ってゆく。極めて個人的な実感や経験的な内容になるが、自分の変化または変容する過程は質的な理解が必要と考えてのことである。答えを導き出すに至っていない疑問も、矛盾もあるが、それらの意味の混乱にも何か意味があるものと考え、あえてそのままにして、後々にまとめて振り返り意味をはっきりさせたい。なお本研究の目的は、今自分自身に起きている混乱を整理し、今の自分観を明らかにする。そしてこれから生きていくうえで方向性を見つけることである。

まず自分自身の変化の過程を整理していくうえでの参考にするために、特に「内なる他者」としての「me」（客我）についての議論をまとめてみた。他者や社会的規範が内面化されたものとしての「私」について考えることによって、自分自身が経験した混乱や変化について理解するための土台を作ることを試みた。

自問自答した具体例をあげながら、自分の混乱の整理を行った。そして、その作業を通して変化した3つの人間のパラダイムを記述し、自分の全体像のイメージを図で示した。さらにこれまでの文中で用いた曖昧な表現などを改めて考え、現在の自分観を明らかにすることを試みた。

結論としては、目的の一つ目である自分観の明示は達成されたが、二つ目の人生の方向性を見つげるまでには至らなかった為、それを今後の課題とする。その際には、本研究から得られた知見として、現在の自分観と自分を見つめる意識の変化、日々新しく見え始める自分の未知だった部分を特に重用視するべ

習熟度学習と評価法

——中学校の事例と考察を中心に——

教育人間学専修 山本 敏 広

近年、習熟度別学習という新しい指導方針が学習指導要領に加わった。この指導方針により学校関係者の方々については、不透明な指導方針の下、指導内容や授業の工夫、人員配置などで苦労していることが多いということをよく聞く。

習熟度別学習の導入は、一九七八年八月「改定高等学校学習指導要領」6の(6)により、学習習熟度別学級編成の実施を高等学校へ要請したことに始まる。つまり、この指導要領から、各学校の環境や事情による様々な解釈が可能となった習熟度別学習がはじまったといってもいいだろう。細かい指導方法を明記せず、各校の状況に応じて習熟度別学習を自由に解釈できるようにしたと思われる配慮が、教育現場に今日の習熟度別学習の導入による苦労と混乱を招いた原因の一つではないか、と私は考えている。

例えば、学校現場でよく聞く習熟度別学習の解釈は、「習熟度別学習と能力別学習は同じ学習法である」という解釈である。しかしながら、文部科学省や都道府県教育委員会では、「習熟度別学習と能力別学習は異なる学習法である」と解釈し、この解釈の違いが教育現場に苦労と混乱を引き起こしている。

また、習熟度別学習の解釈が統一されていないことから、習熟度別学習の研究はまだ始まったばかりといえ、様々な状況に対しての考察が十分にされておらず、習熟度別学習の可能性は未知数だといえる。

正直なところ、筆者は習熟度別学習を批判的な姿勢で捉えている。しかし、本当に習熟度別学習と能力別学習は同じ学習法なのだろうか。同時に有効な習

熟度別学習の導入方法はないのだろうか。この論文は、以下の2点を中心に考察していきたい。

① 文部科学省の解釈による習熟度別学習と、差別的な学習法だと批判されている能力別学習は同じ学習法なのかどうかについて

② 習熟度別学習を導入した中学校を研究の対象にし、そこから考察される習熟度別学習の可能性について

そして最後に、この2点から習熟度別学習の今後の課題も明らかにしてみようと思う。

セクシュアリティの「真理」

教育人間学専修 単 曉 琳

規範や道徳はそれぞれの時代によって異なる、しかし、私たちはそれを深く信じ、自分の意識、思想及び行動を左右されることが多い。とくに性（セクシュアリティ）という部分において、個人的なものであるにもかかわらず、どうして規範とか道徳によって問題視されるのだろうかと疑問は大きい。本論文でセクシュアリティはどのようなふうにならね、人々にいかなる方法でそれを性の「真理」だと信じ込ませたのかを説明していく。セクシュアリティが歴史の中で生まれてきたと主張する社会構築主義のアプローチに学びつつ、社会構築主義に貢献したフーコー、及びフーコーの思想を受け継いだといわれているクィア理論の研究を紹介する。そしてセクシュアリティにおける、我々の思想の拘束の仕組みを解明し、この拘束から脱け出し、より自由になる方法の存在／不存在を追求する。

フーコーは19世紀になると医学、言説などによって「規範的人間」とは何かを規定し、同性愛者は、ひとつの顔を持った人物であり、ひとつの種族となつたと述べた。知の分節化、言説の流布を通じて、「真理」、常識、規範というものが歴史の流れの中で、生まれてきたことがわかった。そして、権力は管理、監視という手段を使って、我々の身体への綿密な管理によって、人々の中に監視の目を刻み込むことができ、監視システムの社会をつくりあげた。フーコーは、言説、権力、セクシュアリティにおいて個人が自己自身を分析し自分自身を管理、監視し、自己との関係の中で主体を構成したと考えられた。

我々はこの作られた「真理」によって拘束されており、この拘束から脱け出す方法は「主体の再構成」だと考えた。主体の再構成は自己への配慮を前提と

して、自由の実践を行うことである。フーコーの思想を受け継いだクィア理論では不変性、永久性といったものを排除し、既成のカテゴリから外れた行為を行うなど、主体の可能性、創造性を制限しないことが考えられた。自由の実践においてフーコーは人生そのものを一個の芸術作品にしないといけなると考えた。中国のダンサー「金星」の紹介を通じて、実存の美学について考える。最後に、現代社会における管理問題と結びながら議論する。

浮舟の想起と忘却―表現を基軸として―

日本文学専修 後藤 恵子

源氏物語は従来、成立論・構造論・表現論等から、最近では、絵巻との関係や、ジェンダー論の視点に至るまでさまざまな角度から研究がなされている。多くは、精密な調査から導き出されているものであり、物語理解に役立つ有効な論考のように思う。修士論文において論じたものは、そのような研究方法の中でも、とくに人物の心情における叙述方法に着目し、論じたものである。

言うまでもなく源氏物語の中に登場する人物は、一応一人と数えられる者だけ拾っても、三六〇人ほどはいる。その中には、数回登場するのみで、物語全体からみればさほど重要でない人物もいれば、物語全体に影響を与え得る重要な人物達もいる。私が、修士論文で取り上げた人物とはそのような物語人物の中でも、浮舟物語に登場する主人公、浮舟である。周知の通り、浮舟は、宇治十帖の物語人物であるとともに、源氏物語最後の女主人公でもある。物語の終焉に登場する浮舟、彼女を分析することは、同時に、源氏物語が、何を描こうとしているものなのか、また何を描き得たものであるのか、という問題を解き明かす一つの糸口にもなるのではないかと考えている。

一口に浮舟の分析といっても、様々な見方がある。浮舟の和歌に着目した論考、侍女や母親といった脇役から分析する論考、その他、話型や形代、引用といった面からの論考などがあげられよう。特に、和歌に着目したものは近年、盛んに研究がなされ、立て続けに発表されている。ただ、そのような多岐にわたる浮舟の研究方法の中で、源氏物語が、何を描こうとしているものなのか、また何を描きえたものであるのか、といった解明に、おそらく順当かつ自然な方法というのは、浮舟の生き方を彼女の心情に即して読むことであり、それがどの

ような叙述で表現されているのかということではないだろうか。

浮舟はその心内表現を見ると、きわめて多くの過去を思い出す女君として書かれている。それは、浮舟の心内表現の多くを占めているのが、回想による叙述であることを意味する。この回想の叙述によって浮舟の心情が多く書かれているというのは、源氏物語の中でも特異なことであろうが、さらに特徴的なのは、回想の叙述方法にある。浮舟における回想の叙述方法は、単に過去を思い出すという書き方がなされているだけではない。何かを思い出し、次に何かを忘れるという想起と忘却による回想表現（これを論文中では想起・忘却形式の回想表現と名付けた）で書かれている。作者は、なぜ、源氏物語最後の主人公、浮舟にのみ想起・忘却形式の回想表現を使用したのか。これを解明することは、最終的に源氏物語が何を描こうとしたのかという問題にも、つながるのではないだろうか。

そこで本稿では、浮舟物語の主人公浮舟における想起・忘却の回想表現を分析し、作者がなぜ浮舟にのみ、想起・忘却形式の回想の叙述を使用したのか、想起・忘却形式の回想によって書かれた浮舟の心情はどのようなものであったのかについて明らかにしていきたい。以下各章の概要を説明する。

第一章では、そもそも回想の叙述が物語とどう関わっているのかについて考察し、物語の根幹に回想の叙述があることを指摘している。

第二章では、第一章で述べたものとは異なる、回想の叙述の効果について、更級日記、蜻蛉日記を例にあげ説明している。

第三章では、源氏物語において、回想の叙述がどのように使用されているかを考察し、その叙述が、人物の造型や物語の重層性を表すのに有効的であることを指摘する。

第四章では、浮舟物語における想起・忘却形式の回想の叙述について分析し、浮舟の忘却が愛執の問題に起因することを指摘する。

第五章では、第四章で出てきた愛執の問題について、源氏物語正編と関わらせ、源氏物語の一つのテーマに愛執の問題があることを指摘する。

牛頭天王縁起考

日本文学専修 鈴木 耕太郎

中世期から近世期にかけて、防疫神として様々な位相の人々から信仰の対象とされてきた牛頭天王。仏教・神道・陰陽道などにも取り込まれ、確固たる信仰基盤を築き上げたこの渡来神は、しかし、明治維新期の廃仏毀釈運動により、徹底した弾圧を受けるに至った。裏を返せば、それ程までに人々の間に信仰が浸透していたことの現れともいえよう。

しかし、何故、一介の渡来神が様々な宗教に取り込まれ、日本各地で信仰の対象たり得たのか。従来の先行研究は、この点を明確にしていない。その理由は、牛頭天王信仰の主体、即ち信仰を広めた様々な人々や信仰を受容した人々について詳細に検討されてこなかったからである。本論では、特に牛頭天王信仰を広げた人々の意識や活動の様子を、信仰の由来を説く「牛頭天王縁起」から読み解き、信仰の本質に迫ることを目的としている。

三章構成の本論は、まず第一章で、先行研究の成果と課題をまとめ、牛頭天王縁起の定義や二十数本ある縁起の簡単な紹介を記した上で、第二章から各縁起に対する考察に入る。牛頭天王縁起の中でも成立が最古とされている『積日本紀』所収「備後国風土記逸文」を例に、牛頭天王と同体視されている武塔神などは、本来別神であり、時代を経るにつれ徐々に牛頭天王へと習合した可能性を指摘した。更に、神道家による牛頭天王信仰については、『積日本紀』に記されている卜部兼文の影響であることを示した。次に『伊呂波字類抄』『祇園』の考察では、祇園社が創始直後から防疫の役割を担っていたものの、同時にそれは祇園社に特化した役割でもなかったことから、祇園社創始当初は、防疫神・牛頭天王が必ずしも祭神として祀られていたとはいえないと指摘した。また、

同縁起に見られる大陸的世界観と僧侶による牛頭天王信仰の受容との間に関連性があることも示した。最後に『峯相記』所収「廣峯山縁起」では、播磨国の法師陰陽師集団が、牛頭天王を信仰対象としていたことについて言及した。

これらの考察を踏まえ、第三章では、後世の牛頭天王縁起に影響を与えた『簠纂内傳金烏玉兔集』所収の牛頭天王縁起、及び『神道集』所収「祇園大明神事」「赤山大明神事」について言及した。まず『簠纂内傳』では、法師陰陽師など非宮廷陰陽家が、従来の陰陽思想から脱却し、曆神・牛頭天王を中心とする新たな陰陽道を築いたのではないかと考察した。一方、天台系の唱導僧により同時に編纂された『神道集』所収縁起には、それら唱導僧が、自らの教義の枠内に牛頭天王を組み込もうとする意識が見えると指摘し、『簠纂内傳』と同様の内容でありながら、その実は大きな差異があることを示した。

以上の考察結果は、牛頭天王縁起が、書き手や（縁起を用いて）布教した者の意識及びその様子を明らかにする有効な史料であることを示している。そのため、この研究を進める上で、各縁起の世界観を更に明確にすることが急務といえよう。

近世期諷刺資料の一考察

― 抜文句見立を中心に ―

日本文学専修 森 脇 裕 子

近世後期から近代初頭にかけて発行された「かわら版」や当時風説を留めた日記や随筆類に見られる、落書とも呼ばれる諷刺文芸は、様々な形式を用いて世相を語っている。

これらは先行研究では、庶民史における思想・世相の資料として、また他にはそのメディア性に着目し、封建制度下における情報の流通、伝達方法の変移を見る資料として扱われてきたと言える。しかし、「情報」に重点が置かれているため、取り上げられる資料はその「情報」内容が政治的情報に偏りがちである。言うならば、政治的情報、または当世の政治が影響する世相を見るためにこれらの諷刺文芸が使われており、補助資料の域を抜け出していない観がある。諷刺文芸を資料として取り上げる場合、その時事内容は考察されているが、その資料に見る文芸形式の特徴にまで言及されているものは少ないのである。

そこで本論文では、時事内容ではなく諷刺文芸の一形式に視点を定め、その変容を追うことで、近世後期庶民文化の新たな見解を打ち出すことを試みた。

取り上げた形式は、「抜文句」形式のものである。一章では、先行研究の記述からまず諷刺文芸が見られる資料を、呼称を中心に整理し、また、「抜文句」形式が現れるまでの諷刺文芸の変遷を形式の多様性や数量から辿った。二章では、「抜文句」形式の諷刺文芸に関して、私的定義を試みた。従来「抜文句」と呼ばれていたこの諷刺文芸は、浄瑠璃（稀に歌舞伎）の詞章から引用したい文句を抜き出し（＝抜文句）、その抜き出した文句に時事ネタを当てる（＝見立てる）形式で出来ているので、「抜文句見立」とした方がその性質を表していると考えた。

実際、現存する摺物の題名には、「抜文句見立」とするものが多い。

三章では、抜文句見立の題名や内容考察から、その表現方法の変遷を追った。そこで表現方法の転換点は天保の前期にあるのではないかという見解を得た。天保以前では、抜文句は、そのオリジナルの世界（浄瑠璃作品）を反映した用いられ方をしているが、それ以後は、オリジナル世界からは離れて、単なる具体的説明的意味を表したいが為の文句使用になっていく傾向が見られたのである。四章では、天保前期について整理し、この時期は、おかげ参りや砂持ちなど、民衆の大規模な行動による文化が起きた時代であることを示した。天保以前の抜文句見立は周知の個人を見立てるものが多かったが、この行動文化の発生により、群衆を見立てるようになる。個人が起こした特定の事件というより、社会現象を捉え、群衆という不特定多数の動きを示すようになった為、使用される抜文句も説明的役割を果たす文句が多くなったのではないかと考えた。

先行研究では天保の改革を、諷刺文芸変遷のキーポイントとしてあげる傾向にある。しかしそれは、天保前期の民衆の行動文化によって諷刺文芸の基礎が出来上がっていたからこそ、天保の改革時にその高まりが見られたのではないだろうか、というのが私の本論文における結論である。

太宰治「皮膚と心」論

— 肉体と精神のバランス —

日本文学専修 金 混 芝

本修士論文では、太宰治の「皮膚と心」(『文学界』昭和一四・一一、「皮膚と心」竹村書房 昭和一五・四)という短編の、語り手・〈私〉の「皮膚」と「心」のバランス、言い換えて、「肉体と精神のバランス」について述べている。「皮膚と心」の、太宰治の語らせた女性の語り手・〈私〉の二日間は、「皮膚」と「心」について、「吹出物」が広がった状態の「皮膚病」を素材として書き進められている。そのため、「皮膚」状態を、視覚的感覚などの感覚表現を用いた描写が多く見られるが、この作品においてこのような「皮膚感覚表現」は、「皮膚病」がもたらす様々な感覚が「皮膚」の主体となる人物・〈私〉に与える影響を表現したものであると考えることができる。本論では、これに加えて、「皮膚と心」についての「女性性」、「吹出物」の原因、〈私〉と〈あの人〉との心理的距離などについて、「蔓バラ」や「化粧品」、「私」を巡る人間関係などを通して検討している。

本論の第一章では、太宰治文学における「皮膚と心」の位置付けについて述べており、主な内容は、「畜犬談」や、「おしゃれ童子」といった同時代作品や、「皮膚と心」を含む「女性の独り言形式」小説を通して考えた「皮膚と心」の特徴についてである。

第二章では、「皮膚」と〈あの人〉と〈私〉という主題のもと、「蔓バラ」や「吹出物」、「化粧品」などが、〈私〉の「皮膚」とどう関係していくのかについて述べている。

第三章では、「皮膚」と「女性性」がどう繋がっていくのかについて、〈私〉を巡る人間関係を通して考えている。

この作品は、語り手・〈私〉が「吹出物」によって、心理的不安に陥り、その不安が、〈あの人〉との結婚生活においての「肉体と精神」の問題に繋がっていく二日間を描いたものであるが、「吹出物」によって〈私〉の「肉体と精神のバランス」が崩れる決定的理由となるのは、〈私〉の夫・〈あの人〉、また〈あの人〉の前妻であった〈せん〉の女のひとと対〈私〉、という人間関係があるからであり、これ以外のなものでもなく、「皮膚と心」という作品は、「吹出物」による「肉体」の乱れ、人間関係による「精神」の乱れを描いた作品であると考えられる。

芥川龍之介の告白文学

—『或阿呆の一生』へのプロセス—

日本文学専修 韓^シ 鉦^{オク} 傘^{サン}

日本近代文学史上、芥川程多面的に捉えられた作家はそう多くない。それは芥川の文学的面、かつ人生の面においてもそういえるだろう。文学的面においては、初期（歴史小説・王朝もの）と違った晩年の作品は、自分をモチーフにした、いわゆる告白的形式を用いたもの（以下告白文学と記す）は最も注目できよう。そしてこの告白文学生成の背景として、同時代の文壇に流動していた心境小説及び私小説をあげられるだろう。この時期の作風とテーマの変化は確かにその以前の作品とは異なっている。たとえば、方法的面においていえば、作品に自分を描き出すといった、〈保吉もの〉^①の代表的作品の一つである『少年』^②もそうであるが、これらどの作品も告白的・回顧録的なものである。しかし、『少年』のように〈保吉もの〉には、方法的面において告白文学的傾向は見られるが、告白文学としては完成されていない。つまり〈保吉もの〉には、まだ告白文学とよべない要素が多分にあり、それらの規範の範疇の問題も含め、残された課題も多い。

従って本稿の目的は、芥川の肖像が主人公である作品を追っていく事によって、告白といった装置を用いた方法の諸相を発見しようと試みるところにある。例えば、『大尊寺信輔の半生』^③においては、自分が「本所」の中でしか生きられなかったというふうに直接には書かれていない主人公の内面までも、われわれに感じさせるのである。また『点鬼簿』^④においては、作中の「点鬼簿」に記されている三人（母）「姉」「父」が、芥川の人生における最も大きな影響を与えたとされる「家族」であることと、「一」の末尾に「実父の命日や戒名を覚え

てゐない」と云いながら、「三」の末尾においては「大きい春の月が一つ」という風に明確には記していないが、ここには満月の春の日という解り易い事実をわざと量かしていることで、僕は父の命日も覚えていたはずなのに、芥川は覚えていないというふうに描いているなどの虚構化が施されていることがわかる。このように、作品に作者が存在する以上は必ずどこかに事実とは相反する嘘がよりリアルに告白と感じられるのである。

『或阿呆の一生』^⑤は遺稿であるとのことと、原稿から抹消された「自傳的エスキス」^⑥という割註の記のことや作中の記述の為でもあろうか。こうした問題も含め、『或阿呆の一生』はまぎれもなく、作家芥川のいわゆる自伝的告白文学の集大成であると思われる。

『或阿呆の一生』は、芥川の伝記の外的事実にも忠実なものではあるが、しかしその真の姿は、芥川の内的精神のほとんどすべてが告白という装置を以て、この作品に吐露されている。たとえば、「時代」と「母」と「或阿呆の一生」とのキーワードがそれである。この作品には彼の人生において味わった事実を抒情的な言葉をもって告白されているのである。このもつとも個人的な告白文学が、より人間味を感じさせるのであろう。こういったことから考えれば、芥川は芸術至上主義者ではなく人間主義者として、もつとも人間の文学を産出したのではないかと思う。

注

① 〈保吉もの〉とは、保吉という主人公が登場する短編小説群の総称であると考えられている。また、これ等作品に登場する主人公保吉とは、大正五年二月から大正八年三月までの二年余の間、横須賀海軍機関学校の英語の嘱託教官を務めた、肖像化された作家芥川の分身であるとみられている。恐らく、これは、『保吉の手帳から』の初出の冒頭に、「堀川保吉は東京の人である。二十五歳から二十七歳迄、或地方の海軍の学校に二年ばかり奉職した。以下数篇の小品はこの間の見聞を録したものである。保吉の手帳と題したのは実際小さいノート・ブックに、

その時時の見聞を書きとめて置いたからに外ならない」(初刊本『黄雀風』では削除された文」という前文によることからのものでもあろう、しかしその規範の定義においても課題がなくもない。

- ② 「中央公論」第三九卷第四号、大正一三年四月、五月連載。(四月号に「少年」の題で「一 クリスマス」「二 道の上の秘密」「三 死」の章発表、五月号に「少年続編」として、「一 海」「二 幻燈」「三 お母さん」の章発表)〈全集第一一巻〉

- ③ 「中央公論」第四〇卷第一号、大正一四年一月

- ④ 「改造」第八卷第一号(「学生事件批判」号)、大正一五年一〇月

- ⑤ 「改造」第九卷第一〇号、昭和二年一〇月、遺稿(全集はこれが底本)

- ⑥ 「自伝的エスキス」というのは、「改造」(昭和二年一〇月)に遺稿として発表された『或阿呆の一生』の芥川の前書きに続き、久米正雄による作品発表経緯の説明文からの引用であるが、是もまた次の様に記されている。

小説・戯曲中に描かれる二郎神像

—信仰対象との比較を通して—

中国文学・思想専修 福岡 千穂

中国の神様に二郎神という神がいる。近年では、創作物や娯楽物の中の登場人物としての姿の方が広く知れ渡っていると思われるが、本来は、信仰対象としての神であり、人々に厚く信仰され、現在も信仰されている由緒ある神である。小論は、これら二つの面を持つ二郎神の、中国の小説・戯曲中に描かれる姿を、中国における信仰対象の姿との比較を通して論じようと試みたものである。

第一に、信仰対象としての二郎神を検討した。二郎神は、蜀、現在の四川地方に信仰の端を発した神であり、元来の神格は治水神とされている。時代が下るに連れ、信仰地域は中国全土に広がり、その神格も変化している。小論では、本来の治水神の神格を持っている事例を、正史、地方志、随筆などの記述から取り上げ、後に二郎神として祀られるに至った、人物に付随する説話類を中心に検討を加えていった。治水神である二郎神は、人々に害を与える江や水の神、龍、蛟と戦い、それに勝利したという、「戦う」ことが中心となる説話や伝説を所持しているのである。

第二に、小説・戯曲中に描かれる二郎神を検討した。小論での対象作品は、中国近世、元・明代の小説・戯曲と限定し、小説では『西遊記』と『封神演義』の二作品、戯曲では「西游記雜劇」、「二郎神醉射鎖魔鏡」、「二郎神鎖齊天大聖」、「灌口二郎斬健蛟」の四作品を取り上げた。これらの作品における二郎神は、自分より立場が上の者からの命令により、悪行を働く者を退治することを役目の一つとする者、つまり「武神」と呼ばれる神としての要素を持つ者として描かれていた。

「戦う」という共通する要素を所持している二つの二郎神ではあるが、どこか大きな溝が存在すると論者は考えた。単純に、小説・戯曲中の二郎神は武神という神であることに対し、信仰対象の二郎神は、その説話中で活躍している時点では、ほとんどが人間であるという理由だけではない。また、文献上ではあるが、明代までの信仰対象の二郎神に関する記述を見ると、武神としては祀られていないということもある。この度の考察では、溝ができてしまった要因、そしてその溝を埋めることができる要素を見出すには至らなかった。ただ、論者が見出した一点は、「害を与える、もしくは与えていた悪しきものを取り除く」ことが、両者には共通しているということである。しかし、この一点のみに頼ってさらに考察を進めていくのは難しい。未だ、様々な方面から、検討の余地は多く残っている。

『孫子』より指導者・組織論の考察

中国文学・思想専修 山口 真 貴

『孫子』は一般的には兵家の書、兵法書としての認識があるが、その思想は現代にも応用が可能ではないかという視点で、今回考察した。

まずは『孫子』の序であり、全体に通ずるものを述べている「始計」篇を中心に解釈した。「始計」篇自体、組織にとって必要なものである「五事」。彼我を比べる要素である「七計」、實際行動する際の指針としての「詭道」の三段に分けられ、その各段は他の各篇とそれぞれ関係するものとなっている。故に『孫子』各篇は、それぞれ別のことを述べながらも、「始計」篇においてその思想が根底で繋がりにあっているものとされる。

以上を明らかにした上で、組織論と指導者論について、それぞれ『孫子』がどのように関係するのか。まず組織論については、「始計」篇に述べられた「五事」、その中でも特に「道」と「法」が重要とされる。それをもって、組織を一体とすることが重要とされる。そして、組織全体に情報が潤滑に通達されるための整然とした組織の構成を作ること、また組織自体が何らかの行動を起こす際に、命令が正しく行き渡り、混乱を起こすことなど決してないよう、運用していくということが重要とされること等、現代に応用されうる思想が見られる。また指導者論では「五事」中の「将」が重要とされ、そしてまた「君」と「将」という二つの形の指導者の像が上げられる。トップリーダーとしての「君」と、組織内の組織をまとめる「将」と、それぞれに求められる像はやや差異があり、相互の関係を密にすることなども重視される。しかし最も重要とされるのは組織に所属する者達を一つにし、正確な情報を集めて組織をまとめ、そのために組織内の信頼関係を強固なものとし、組織の質自体を向上させることである。

指導者には、それらを行うための資質が必要であり、それは常に自らを省み、組織や組織を構成する者のための責任を果し、不合理な行動を取っていないかを考えなければならない。これが指導者論の要である。

以上のように、『孫子』からは指導者・組織論について、現代に応用出来るもの一端に触れることが出来たように考える。これはあくまで一考察に過ぎないものでもあるが、この僅かな範囲であったとしても、『孫子』が未だ現代に応用出来る書物であり思想であることを証明することが出来た。

Seamus Heaney's Sense of Belonging: from *Death of a Naturalist* (1969) to *The Haw Lantern* (1987)

英米文学専修 高野 寛 之

本稿は北アイルランド出身の詩人シェイマス・ヒーニーの帰属意識を、彼の詩集 *Death of a Naturalist* (1966) から *The Haw Lantern* (1987) の解釈を通じて明らかにするものである。一九六〇年代に起きた北アイルランド紛争渦中の一九七二年に、ヒーニーは生まれ故郷である北アイルランドを離れ、ダブリンに移り住みアイルランド住民となる。イギリスのアイルランド支配の爪跡としての北アイルランド紛争が人々の意識に残した帰属意識の変化は大きく、詩人としてのヒーニーのそれも詩集の中で巧みに表現され、大きな変容を遂げている。本稿では特に、初期から中期の作品に表象された国家性、地域性、またそれを越える普遍性としての帰属意識を中心に述べていく。

第一章は初期の作品である *Death of a Naturalist* (1966), *Door into the Dark* (1969), *Wintering Out* (1972), *North* (1975) を通じて、ヒーニーの帰属意識がアイルランドとイギリスという国家レベルでの意識が強いことを証明する。特に、アイルランドにとって消し去ることのできないイギリスによる帝国主義と植民地化という歴史が、アイルランドの地理的特徴である「海」と「沼」という描写を通じてどのように述べられているかを明らかにする。

第二章は *Wintering Out* (1972) の作品に多く含まれる地名に関する詩の解釈を通じて、ヒーニーの地域性に関する帰属意識を明らかにする。北アイルランドの紛争を目的の当たりにしながら、北アイルランドの地名に代表される言語の英国化という植民地主義の残滓とどう向き合ったのか。アイルランド独特の口承伝統を踏襲した表現を用い、英国化された北アイルランドの言語を再構築化／

脱植民地化しようと試みながらも、一方では生まれ故郷である北アイルランドというアイルランドとイギリスの両文化が収斂する場所としての独自性、地域性をどのように表現したのかを明らかにする。

第三章は中期の作品 *Station Island* (1984) や *The Haw Lantern* (1987) を通じて、ヒーニーの帰属意識が国家性や地域性という概念を超えた、メタレベルでの詩そのものに対する意識を強めていくことを明らかにする。北アイルランド紛争という社会的混沌の中で、自らの詩作そのものに疑問を感じ深い省察に入ると、自らを聖パトリックや『神曲』を著したダンテに重ねあわせ、自らの詩作行為そのものに対する疑心を一掃する旅に出る。ヒーニーに大きな影響を与えた歴代のアイルランド作家たちなどの想像上の出会いにより、彼は詩作への信頼を回復していく。本章では、真の意味での帰属意識が、国家性や地域性に限定されることのない普遍性としての詩／執筆そのものにあることを明らかにする。

C.S. Lewis, *The Chronicles of Narnia* におけるプロット構造について

英米文学専修 田中俊也

本論では空想世界を描いたファンタジー文学の金字塔とも言える、C.S. ルイスの『ナルニア国物語』(*The Chronicles of Narnia*)を扱う。『ナルニア国物語』は全7巻から構成される。それらは、発刊順で言えば、『ライオンと魔女』(*The Lion, the Witch and the Wardrobe*)、『カスピアン王子のつぼみ』(*Prince Caspian*)、『朝ひらき丸東の海』(*The Voyage of Dawn Treader*)、『銀のすず』(*The Silver Chair*)、『馬と少年』(*The Horse and His Boy*)、『魔術師のおと』(*The Magician's Nephew*)、『最後のたたか』(*The Last Battle*)の7冊である。年代順に並べれば、その順番は発刊順と異なるが、全7巻を通じて、ナルニア国の創世から破滅までの二五五五年に渡る歴史を描いている。

ルイスの『ナルニア国物語』はルイス自身が敬虔なクリスチャンであり、神学の研究書を書くこともあったことから、ルイスは聖書の内容をこの『ナルニア国物語』に含ませている。それは主として、善と悪との対立という暗喩である。本論ではまず、『魔術師のおと』でナルニアの創世について考察していく。ここでは、ルイスが影響を受けたと思われる「創世記」(*Genesis*)やミルトンの叙事詩『失楽園』(*Paradise Lost*)との比較をしながら、プロットの構造について考察する。また、善と悪との対立では、主人公デイゴリーの心の変化について考える。

次に、『魔女とライオン』を考察する。イエス・キリストの受難と復活をテーマに描いたこの作品はその受難と復活について、またエドマンズの裏切りと救出後の活躍に見られる善と悪との対比について考察する。

最後に、『最後の戦い』について考察する。これは、『魔術師のおい』とは対照的にナルニアの滅亡を描く作品である。主として最後の審判を扱っており、「ヨハネの黙示録」(The Revelation of John)などを参照し、ルイスの下す審判について考える。

ルイスは「人の心に潜む、真善美に対する憧れに語りかけて読者を一步一步導いてゆくのがこのフェアリー・テールである」と考えていた。この壮大な年代記は、雪の中で1人の少女と1人のフォーンが出会っているというたった1枚の絵から始まったとルイスは言う。このたった1枚の絵から生まれたプロットに様々な神学的暗喩を取り込むことで、読者を7篇の真善美の物語へと一步一步導いていったからこそ、このフェアリー・テールは多くの人に愛されているのではなからうか。

注

① 竹野一雄、山形和美(編)、『C・S・ルイス ナルニア国年代記読本』(国研出版、一九八八)39頁

蝦夷論再考——「征夷」の本質をめぐって——

一一〇

日本史学専修 田中梓水

古代国家の蝦夷支配を「同化と拓殖」という視点から考察する。第1、2章では、日本における俘囚身分の形成過程を、日中用例の比較検討、特に献俘・献捷と呼ばれる戦勝儀礼の検討を通じて考察した。献俘・献捷儀礼は戦争捕虜を王に献上して皇威を称える儀礼であるが、蝦夷の捕虜である俘囚にとって、この儀礼はその身分化に直接影響したのである。儀礼を契機として俘囚身分の成立を考えることで、従来不明確であった俘囚の存在意義、移配の理由、そして身分成立の時期などを明らかにした。

第3章では、9世紀以降行われた中央における俘囚の節会参加を検討し、当該期の節会参加は、奈良時代の蝦夷朝貢とは異なり、俘囚の教化・同化的側面が重視されていたと結論づけた。儀礼の場が夷狄の同化に重要な役割を果たしたことも指摘し、華夷秩序においては夷狄の同化こそが重要であることを明らかにし、夷狄の同化が帝国構造の空洞化を招いたとする通説的見解の誤りを指摘した。

第4章では、以上の蝦夷・俘囚支配を行わしめた華夷思想に注目し、華夷思想は単なる異民族支配の論理ではなく、逆に血族論理を打破し、礼的秩序のもとに包括する支配論理であること、この論理の上では、「夷」を「華」に近づける同化プロセスが欠かせないものであることを指摘した。蝦夷支配の基本的方策である朝貢と饗給は、従来懐柔策としての側面が注視されていたが、朝貢・饗給の場では、「夷」に「華」と「夷」の差を焼き付け、「夷」に「夷」であることを強く意識させることによって彼らの教化・同化が目指されていた。

以上、蝦夷のなかでも俘囚という集団に注目しながら、征夷とは何であった

のか、何のために行われたのかという本質的問題に取り組んだ。結論として、夷の本質とは同化と拓殖であるが、俘囚身分とは特にその本質がよく現れた存在である。彼らを考察することで、日本の古代国家における統治思想の一端を明らかにし得たと考える。

律令国家における得度制度の変遷とその史的意義

日本史学専修 駒井 匠

日本古代において、仏教は国家の管理下に置かれ、様々な保護統制策を受けていた。その管理の下、僧尼は教学研鑽に勤しみ、国家のために仏事を行っていたというのが通説的な理解であろう。その僧尼となるための第一段階として得度というものがあるが、それも国家によって管理されていた。国家の管理下にある得度制度によって仏教の担い手たる僧尼が生産される。得度制度とは仏教政策の根幹を支える制度であると言っても過言ではない。得度制度の検討を通じて、国家が僧尼をどのような存在として捉えていたのかということや、国家が仏教に期待したものは何であったのか等を読み取ることができ、さらにそこから国家と仏教の関係がどのようなものであったのかを考えることも可能であると考える。

これまで得度制度は統制と育成という枠組みの中で研究されてきた。得度制度に僧尼の統制と育成という側面も見られることも確かであるが、本論文では得度制度の持つ人材登用という側面に着目した。得度自体は俗人に対して行われるものであり、得度制度関係の史料にも、国家がどのような人物を僧尼として登用しようとしたのかが示されていると考えられるからである。このような視点に立つ場合参考となるのが、官僚制の研究である。ここでは、国家がどのような人材をどのような方法で官人として登用しようとしたのか、そして国家と官人の関係性が具体的に明らかにされてきており、得度制度を考察する上でも有効な視点であると考える。

本論文では、得度のための学業基準がはじめて設定される天平六年（七三四）十一月二十日太政官奏から、延暦二十五年（八〇六）正月二十六日太政官符まで

を対象とし、統制と育成という枠組みに拘らず、官僚制的視点から得度制度の変遷を考察した。第一、二章では天平六年太政官奏を考察した。官奏では学業基準が設定されているが、それが官人制に准えたものであることや、その内容が養老年間に提示された学業の枠組みをそのまま継承していること、そして、この官奏が官人政策の流れの中から発布されたものであることを明らかにした。第三章では延暦年間の得度制度を扱った。ここでは昇進という点に注目し、延暦二十五年太政官符によって得度そのものが昇進への入り口と位置付けられたことを指摘した。

中世武士団の族的結合——文書の所持と相伝——

一一二

日本史学専修 田辺 記子

一般に中世武士団の族的結合は、一族の長たる惣領が「惣領権」なる権限を梃子に、庶子に対して強い支配力を有していたと考えられており、その具体的な指標として惣領による文書の集中所持があったことが指摘されている。先学の研究においては、所領が諸子に分割譲与されても、その本文書等は惣領が所持しており、これを惣領の一族所領統制における一機能と位置付けられている。

しかし論証の過程で、それが伝来の現状に拠っていること、また惣庶双方からではなく惣領の文書所持のみを論じているところに若干の疑点が残る。そうしたことから本稿は、所領の分割譲与が嫡子単独相続へ移行する以前の肥後国相良氏・信濃国市河氏・肥前国松浦党三武士団を対象とし、誰がどの文書を所持していたかという文書所持構造について複数の事例を比較検討することによって、中世武士団の族的結合の実態を明らかにしようとしたものである。武士団の選定にあたっては、当該期文書がまとまって残っていること、東西いづれかに地域が限定されないこと、従来の族的結合研究において形態が異なることとされる「惣領制的武士団」・「党的武士団」の両方を取り上げることの三点を考慮した。

上記武士団における文書所持構造を検討した結果、いずれの武士団においても共通して言えることが大きく分けて二つある。第一は、所領が分割譲与されても、本文書等は惣領が所持しているということ、第二は、惣領が分割可能な庶子分文書までも所持しているという事実はないということである。第一の点については先学の指摘するとおりであるが、正文は一通しかなく分割不可能であるという物理的事情や、惣領が証文を所持しているにも拘わらず、惣庶関係（親

子を除く)の対等性を指し示すような実態が見られることから、その事実を惣領の統制権と結びつけることはできない。嫡子は惣領となつてからも、その権限を前惣領からの譲状によつて制限されていたし、惣庶間の相論においても、惣領は幕府権力を介さず独自に解決の道を開くことはできなかった。また、中世において証拠文書なしに権利の証明をすることは不可能といつても過言ではなく、それゆえ、第二の点を明らかにしたことによつて、庶子は証文を所持することゝ惣領と対等に相対することができたのであり、庶子の証文所持がその独立性を保つ具体的保証となつていたことを指摘した。

近世期における水平的文化交流の様相

——京都本草学の物産会を素材に——

日本史学専修 牟田 友紀子

修士論文では、近世中・後期に京都本草学派が開催した物産会を素材とし、参加者や開催される場の変容、および、本草学を学ぶ者たちの修学環境の分析を通じ、近世における水平的文化交流の様相を考察した。

第一章では、三都の物産会目録や引き札を用いて、物産会は、大坂・京都において庶物の真偽を確かめる必要性から開催されたと論じた。そして、三都の会則を比較した結果、初期の物産会は、物に対して同じような問題関心を共有する同好の士が、主体的に参画・運営した会であったことを明らかにした。

また、松岡恕庵の出版された著書の検討からは、本草学を学ぶ者が書肆からの出版依頼に応じ、恕庵著作の出版事業に関わる中で、実見して弁別するといふ発想の重要性とその受容者層の存在を再認識し、物産会開催へと至つたと論じた。さらに、恕庵著作が出版のたびに正文化していく様子は、当該期において本草学が、学問的地位を獲得していく過程であったと評価した。

第二章では、開催初期にあたる宝暦・明和期の物産会の出品目録などを用い、初期は、会則に忠実で純粹に知的好奇心を満たすために物産会が開催され、主体は町人であることを明らかにした。また、開催会場が東山地域であることから、初期の物産会は、町人の交流手段という「遊芸」と同様の性格を有し、「遊芸文化」と軌を一にした文化的潮流であったと論じた。しかしながら、物産会は、天明三年以降中断する。それは、文化の中核的担い手の変化に加え、天災や江戸への文化・消費の中心地の移行といった社会的状況を背景にしていると述べた。

続いて、山本読書室によって再興された寛政期以降の物産会についても目録を分析し、宝暦・明和期からの会の変容を論じた。再興の契機は、当時京都の本草学大家であった小野蘭山の東去であり、それに伴い後進たちが学を怠るのを懼れ、私塾読書室を中心に、本草学を学ぶ者たちによって物産会が催されたことを明らかにした。こうした会の目録から、知識の定着を図ろうとする、教育的な目的を持った場へと物産会が変質していたことを指摘した。

第三章では、まず、読書室物産会にも参加し、自らも物産会を主催した水野皓山の『皓山日記』を素材に、近世後期の京都における本草学を学ぶ者たちの修学環境を論じた。日記からは、『本草綱目』を教授する福井会や本草会の姿が見られ、『本草綱目』が本草学を学ぶ者にとって重要な参考書であり続けたことを確認できた。また、会での修学内容と物産会の出品内容が連関する事例もあり、当該期の物産会が、日頃の修学と相関関係にあったことを示した。

そして、化政期以後の読書室物産会目録の検討から、読書室物産会は、近世の知を体現するような、様々な出品物を展示するに至ったと論じた。しかしながら、天保期以降の物産会では、『本草綱目』になぞらえた展示が常設されるようになり、それは物産会の形式化とも言うべき変化といえる。物産会の形式化は、階層や地域、知識や関心の質も広範になっていく出品者を迎え入れることに迫られた読書室が、会としての意義を維持しようと物産会の開催自体を目的化していったことの表れであると指摘した。

以上の考察を通じ、水平的な文化交流の先には、新たな創造ではなく、会自体の存続を願う中で、形式化していく側面もあったと結論づけた。

糞尿から見た近世社会

— 農書・糞尿争議の分析を中心として —

日本史学専修 田野 智 和

近年、環境史研究が盛んである。この動きは、八〇年代の環境問題への関心の高まりから始まったものである。そして、近世史研究においても、自然と人間の関係・江戸システム論等のテーマで多くの研究が見られる。そして、こういった流れの中に二一世紀型の循環型社会モデルを構築するという問題意識のもとに江戸を再評価し、そこに学ぶという動きが見られる。これらの論の特徴は、江戸はリサイクルの時代であった、あるいは環境に配慮された時代であった等の評価である。こういった一種の「過大評価」については批判的に検討を行うつつ、これらの論が持つ現代社会の環境に対する危機意識は引き継ぐことを本論文では目指した。

第一章は、「糞尿争議（下肥騒動）」と題して、肥料としての人糞尿取引を巡る騒動について分析を行った。第一節、「糞尿の歴史」では、糞尿が肥料として利用されるまでの流れを概括し、第二節、「江戸の糞尿争議」では、寛政期に江戸近郊農村が起こした糞尿値下げ運動を取り上げ、第三節、「京都の糞尿争議」では、享保期に京都近郊農村が起こした糞尿の流通をめぐる訴えを取り上げた。これらの検討から明らかになった事は、町から糞尿が消えた瞬間を見れば「リサイクル」に見えるシステムが、実際には崩壊しかけていたということである。第二章では、「農書の思想」と題して、農書の思想の変遷を検討した。第一節、「農書とは」では、農書の思想、中国農書の影響などについて概括し、第二節、「農書の思想」では、近世初期絶対的存在であった「天」に対する関心が一八世紀頃には「金」「人」に移行し、一九世紀には、「知」がそれら全てを相対化した

ことを明らかにした。

本論文全体の内容を見た上で整理を行えば、農書思想が「天」から「人」「金」に移った、まさにその時期に糞尿争議は発生したことが理解できる。これは、経済的効率性を重視する姿勢が均衡を持って機能すれば「循環型社会」を不完全ながらも構築する一方、結果的には自己崩壊に陥るといふ例である。こういった問題を認識せずに江戸循環型社会論を論じることは非常に危険なことなのではないだろうか。

清代後期の衙蠹観

——劉衡の官箴書を中心にして——

東洋史学専修 安河内 英 臣

清朝の地方行政における最も小さな行政単位は県であり、その県の長官は知県と呼ばれた。知県は赴任した地域の刑名、錢穀、義倉、教育、教化、郵政、警察等といった赴任した県のあらゆる行政事務を行うための権限と責任を負わされていた。しかし、知県の職務が広範なものであったため、知県が一人でその職務を実行することは不可能であり、胥吏・衙役と呼ばれる知県の部下達が行政上の書類の作成や税の徴収、犯罪者の逮捕などの実務を担当してきたとされる。胥吏・衙役の多くはその地域の人間であり、地方行政において必要不可欠な存在であったが、中にはその権限を悪用して汚職を行う者も存在した。こうした汚職を行う胥吏・衙役は衙蠹と呼ばれ知県の統治に害をなすものとされ、こうした衙蠹による弊害を防ぐべく知県たちが厳しい対応を取ろうとしていたことが地方官の心得書である官箴書からみてとることができる。

本論文の目的は衙蠹達がどういう点から知県にとって邪魔な存在であったかということ考察することを目的とする。1章では『州県事宜』と『学治臆説』というおそらく清朝で最も多く読まれたと考えられる2冊の官箴書における胥吏・衙役に対する記述から、当時の知県たちが持っていた胥吏・衙役に対して放置せずに厳しく監視することで衙蠹の害を防ごうとしていたということについて検討する。2章では知県の職務の中で重要とされる錢穀と刑名において衙蠹による弊害が甚だしく、弊害を為した彼等を完全に除去することが難しかったということから知県にとって衙蠹が邪魔者であると認識された理由を知県の職務という面から明らかにする。3章では道光五（一八二五）年から六（一八二六）

年にかけて四川省重慶府巴県の知県を勤めた劉衡の治績と彼の著した官箴書『庸吏庸言』と『蜀僚問答』内の衙蠹に関する記述と巴県という地域の状況とを照らし合わせることで四川において衙蠹と地方の有力者との繋がりを検討し、知県が統治を行うに当たって衙蠹を除くことによって知県が円滑な地方行政を行うに当たってどういう利点があったのかということについて考察する。以上の作業により知県が衙蠹を悪として認識し、彼等を排除しようとした理由は衙蠹による弊害が単に汚職というだけにとどまらず、知県の自身の進退や郷紳等の有力な在地勢力の地方行政への影響力の行使ということにも関わるものであり、知県の統治において必要な処置だったからではないかとすることが本論文の結論である。

ポピュラー音楽研究の歴史とパンク・ロック

——研究史におけるパンク・ロックの位置付けと現在——

西洋史学専修 小林 真理

修士論文に代わる成果物として、私手がけたのは、一九七〇年代のイギリスの若者文化であり、同時にさまざまなメディアを巻き込んで社会問題となったパンク・ロックがどのような学術領域の中で研究されてきたのかを纏め、研究史の大まかなダイジェスト版として作成することであった。

この中ではまず、第一章でパンク研究を主に行ってきた学術領域であるポピュラー音楽研究の歴史や成り立ちを説明し、そして第二章ではそのポピュラー音楽研究の中でも大きな問題関心として扱われており、またパンク・ロックを大きく取り上げてきたロック研究について纏めている。

第三章では、先のことを踏まえたいうで、パンク・ロックがこの学術領域でどのような評価を与えられてきたかという問題を移行させた。パンク・ロックはその成立以来ポピュラー音楽研究とカルチュラル・スタディーズの中で「労働者階級の若者が階級闘争のための文化装置」として利用したサブカルチャーであると論じられてきたが、現在はこのパンクの「神話化」に対する疑問が生じてきている。この章ではこのパンクの「神話化」への解体に関するさまざまな議論を紹介し、現在のパンク研究が階級問題のみならず、人種問題や文化産業の問題など、ミクロな視点で行われていることを明らかにした。

最後の章である第四章では、自身の関心であった女性、ジェンダーとパンクに関する議論を紹介し、今後のパンク研究がどのように研究の幅を広げていけばよいかを自分なりに言及して終えた。まず、ロック研究自身が男性のシンガーやサブカルチャーだけに注目していたことを批判し、女性のシンガーやファ

ンに焦点を当てる研究が登場したことを紹介した。その次に、パンク・ロックの中に多くの女性シンガーや女性バンドが登場したことを例に挙げて、彼女らが男性中心に動いていたロック、あるいはパンク文化の中でどのような女性像を打ちたてようとしたかを自分なりに考察した。そして、最後はポピュラー音楽研究という領域だけでパンクが語られうるのか、女性パンクのファッションや対象を例に挙げて、パンク研究はその当時の女性のファッションの流行や女性に対する評価など、音楽以外の要素も十二分に考慮して行われるべきであると主張して論文を終えた。

固有の犠牲性から複数の犠牲性へ… ドイツ、ポーランドの「被追放」の記憶の変容

西洋史学専修 前田 郁

修士論文では、主に二つの視点から議論を展開した。一点目は、卒業論文でも扱ったドイツ、ポーランドの「越境地域協力」に関して。「国民国家の黄昏期」の今日、「分断」の境界線だった国境地域では機能変化が生じている。その一つが、ヨーロッパ統合を背景とした国境横断的な越境地域協力である。その中で、ナショナルな空間だった従来の国境地域とは異なる「ヨーロッパ的ローカル」という新しい価値が生まれている。この新しい価値の出現を、普遍化のプロセスとしてのヨーロッパ統合と特殊化のプロセスとしてのローカリズムの相関関係として分析することが現在の課題である。二点目は、ナショナル・アイデンティティとヨーロッパ統合の関係性を分析することだ。ドイツにおける「戦争の記憶」が、一九五〇年代の冷戦構造期と一九九〇年代のポスト冷戦・ヨーロッパ統合加速期とでどのように「変化」しているのか比較研究を行っている。この研究では、ナショナルな領分であった「戦争の記憶」において、「ヨーロッパ」という普遍主義が重要な価値基準になってきていることを指摘し、従来のナショナル・アイデンティティモデルとは異なる新しいナショナル・アイデンティティの分析モデルを提示することを目標としている。

先述した二つの視点をもとに、『固有の犠牲性から複数の犠牲性へ…ドイツ、ポーランドの「被追放」の記憶の変容』を執筆した。修士論文の主題は、集団的記憶と普遍的価値基準の相関関係を分析することによって、ナショナルな集団的記憶の普遍―特殊化を指摘することにあった。具体的には、第二次世界大戦終戦直後に生じた東欧からのドイツ系住民の「強制移住(被追放)」という「ネ

イシヨンの犠牲の記憶」を分析対象に、東西対立激化期とポスト冷戦期におけるドイツの「犠牲者意識」の比較研究を行った。その目的は、「犠牲者意識」というナショナル・アイデンティティが、一九九〇年代以降のヨーロッパやグローバルといった普遍化のプロセスの加速化の中で、どのように「変容」しているのかを分析することであった。また、現実の「強制移住」の現場となった国境地域において「強制移住」のナショナルな記憶が、ポスト冷戦期のヨーロッパ統合の加速化や越境地域協力というトランスナショナル化の過程で、どのように変化してきているのか、ローカルな次元からの普遍―特殊化を分析した。その結果、明らかとなったのは、一九五〇年代にナショナルな「苦痛」を表象するものとして「ドイツ人固有の出来事」と認識されていた「強制移住(被追放)」が、一九九〇年代には「エスニック・クレンジング」という普遍的価値を介在した「複数の出来事」へと変化したことである。一九九〇年代のドイツにおける犠牲者意識は「エスニック・クレンジング」の「すべての犠牲者の苦しみ」を強調し、「エスニック・クレンジング」の犠牲の一例として「ドイツ人の苦しみ」の正統性を主張するものになった。特に、ユーゴ紛争やコソヴォ紛争を通じてグローバルな次元で認知されるようになった「エスニック・クレンジング」という普遍的価値に基づいて、「ドイツ人もまたエスニック・クレンジングの犠牲者だった」という言説が出現したことは大きな変化だった。というのも、たとえばアントニー・スミスの提示するナショナル・アイデンティティ論からはこうしたドイツの犠牲者意識における変化は分析できないからだ。スミスは、ナショナル・アイデンティティはネイションという集団の過去を参照して形成されるものと考えている。しかし一九九〇年代のドイツにおける「犠牲者意識」は、ナショナルな集団の過去を通じて「記憶すべきもの」としての正統性を得るのではなく、「被追放」が20世紀を通じてヨーロッパにおいて遍在した「エスニック・クレンジング」という惨事の一つだったという認識によって形成されている。これは、ネイションの苦痛によって形成される犠牲者意識ではなく、

普遍的価値を介在して形成される犠牲者意識である。修士論文では、こうした分析をもとにナショナル・アイデンティティ論の再考を試みた。

今後の課題。戦争の記憶や犠牲者の追悼というナショナルな領域における近年の変化を、アイデンティティ論へと還元すること。「犠牲者」が、自国民の被った苦痛故の「犠牲」として認定されるのではなく、たとえば「人道に反する罪」や「人権侵害」、「エスニック・クレンジング」の「犠牲」として正統性を確保するようになったこと。グローバルな価値基準の浸透という普遍化のプロセスが、ナショナルな特殊性の領域に影響を及ぼしていること。そして、ナショナルな領域においても巧みに普遍的価値基準が利用され、新たなナショナルな価値が生み出されていること。こうした分析から、普遍的言説と特殊言説の共存という矛盾する状況が見えてくる。スミスはこの共存を不可能だと捉えたが、現実には可能である。それ故に、この研究を通じて、普遍化と特殊化の相関関係を通じたナショナル・アイデンティティ形成という新しいアイデンティティ分析モデルを提示することが課題である。

穀物問題と民衆の国王イメージ

西洋史学専修 正村 尚 弥

18世紀は、農業利益の増大が国富を増大させる重農主義の立場から推進された穀物取引の自由化と伝統的な経済のせめぎあいを展開する時代であった。一七六三年と一七六四年の王令によって穀物取引の自由化が確定したものの、その後も規制派と自由派のせめぎあいが続いた。穀物価格の高騰を背景とした、民衆による小麦粉戦争を受け、その後、政府はフランス革命直前まで市場規制を引き継いだのである。目まぐるしく変化する経済政策は絶対王政の苦悩を示している。

伝統的に国王は民衆から「穀物の分配者」とみなされていた。国王は自身を父と重ねあわせ、子としての民衆の生活を守る役割を担っていたのである。このような国王イメージはカール大帝まで遡るものであった。国王にとって、日常生活に結びつく穀物を安定的に分配することは社会の平静の維持を意味したし、民衆もまたそのような役割を国王に期待していたといえるのである。本論では、伝統的な経済から市場原理に基づく経済への移行期にあって、穀物問題の中で民衆の持つ国王イメージがどのように変化してきたのかを論じている。

18世紀に国王は、「穀物の分配者」という伝統的な国王のイメージを維持し、民衆の期待に応えること、そして何よりも伝統的な経済と市場原理のせめぎあいによって生じる社会の混乱を防ぐことを意図し「国王の穀物」という穀物備蓄政策を推進した。この「国王の穀物」は、伝統的な経済にあっては穀物の安定的な供給を補完する役割を、穀物取引の自由化の時期にあっては自由化によって生じる混乱を未然に防ぐという役割をそれぞれ担っていた。そのため、保守派（伝統的な経済）と自由派（自由主義経済）のいずれもが「国王の穀物」の事

業に積極的に取り組んだのである。しかし、この「国王の穀物」をめぐる穀物の陰謀が作り出されたのである。それは「国王の穀物」が民衆に対して秘密の事業であり、それを運営していたのが伝統的に嫌われていた穀物商人や金融業者であったからである。穀物商人や金融業者そして政府は民衆を餓死させようと陰謀をめぐらしており、穀物価格の上昇や穀物調達や供給をめぐる行動が民衆にとって飢饉の陰謀の証拠となりえたのである。民衆に嫌われた穀物商人や金融業者が「国王の穀物」を運用したという事実は、「穀物の分配者」という伝統的な国王のイメージを維持し、民衆の期待に応えようとする国王の意図とは裏腹に、「国王の穀物」に対する民衆の疑惑を生むことになったのである。この飢饉の陰謀は食糧飢饉の際によく現れ、穀物価格の高騰とともに穀物暴動の原因にもなったのである。

一七六五〜一七七〇年の食糧危機の際、民衆によって、ルイ15世は伝統的に嫌われていた穀物商人と同一視され、さらに一七二五年における飢饉の陰謀の共犯と目されていたブルボン公とも重ね合わせられていた。しかし、穀物商人というイメージは国王個人に向けられた批判であって、国王そのものに向けられた批判ではなかった。一七八二年と一七八三年の食糧危機において、施しを行った国王ルイ16世に対して民衆が賛美を示しているからである。フランス革命の直前に至るまで、国王個人に対する批判は存在したが、国王そのものに対する期待は消えていなかったのである。

このことは穀物暴動における民衆の国王に対する態度についても言える。一七二五年の穀物暴動には、多くの女性が参加していた。女性は、自身と同じ性を持つ王妃に自分の役割を思い出させ、王妃を政治へと向かわせることを望んでいたのである。国王への失望が王妃への期待をもたらしたが、王権そのものへの期待はなくならなかったのである。また、一七七五年の小麦粉戦争において、民衆の暴動を厳しく弾圧したにもかかわらず、民衆はルイ16世の発した言葉を用いて自己の行動を正当化したのであった。

18世紀に穀物問題が生じた時、民衆は国王の振る舞いに対して批判を浴びせながらも、国王に対する期待を持っていた。このような国王に対する期待はフランス革命後も穀物問題の中で生き続けた。フランス革命下で起こった食糧危機における共和政の批判と王政（国王）の賛美は、18世紀に渡って続いてきた国王に対する期待がなければ起こりえなかったものなのである。国王に対する期待が伝統的で、アンシャン・レジームに属するものであったからこそ、共和政への不満は王政の支持へと向かう可能性を持っていたのであった。

震災時の道路閉塞状況からみた文化財の危険度評価

——京都市を事例にして——

地理学専修 亀井千尋

〔研究目的〕

地震防災を考える上で、人命を守ることが最重要課題であることはいうまでもない。しかし、文化財はその価値と特殊性から、独自の視点に立った災害対策が必要であり、文化財の防災対策は人命救助の防災対策の次に重要な課題とみなすことができる。地震災害時には、建物倒壊や道路損傷などにより、道路の通行が不可能な道路閉塞状況が発生し、救援を被災現場に送ることが困難になると予測されている。本研究では、地震災害時の道路閉塞状況における救援の到達可能性という視点から、文化財の危険度を明らかにする。かかる課題を精度高く達成するために本研究では、GIS環境を用いた建物単位での道路閉塞シミュレーションモデルを構築する。

〔方法〕

本研究では、まず既存の地震動の規模と震源に加えて、地盤情報を考慮した地表面の地震の揺れの大きさを求める。次に、建物の被害予測を行うために、建物の建築年代や建築構造の推定を行うシミュレーションを実施し、その結果を用いて、地表面の地震動の予測と建物の建築年代・建築構造をもとに建物の倒壊を予測する。つづいて、倒壊予測をもとに瓦礫の発生をシミュレーションし、道路閉塞状況を推定し、救援車両が活動可能な地域と不可能な地域を示す。これを基に、地震災害時に文化財に対する救援活動が困難となる状況を予測すること文化財危険度評価を行う。

〔結果・考察〕

本研究で得られた結果は、①個々の建物の建築年代・建築構造の推定に基づき倒壊予測を行うことで、詳細な道路閉塞予測が可能になり、震災時の状況を具体的に示すことができた。②道路閉塞予測をもとにした救援基地から文化財までの到達可能性の分析から、到達不可能となる確率が高い文化財が存在することが判明した。③世界遺産や国宝に指定されている文化財の中にも、震災時の危険度が高いものが存在しており、清水寺、慈照寺（銀閣寺）、賀茂別雷神社（上賀茂神社）など有名神社も震災時に救援活動が十分に行えない可能性が高いことが明らかにされた。以上本研究では、道路閉塞が文化財に及ぼす影響について、周辺建物の詳細な倒壊予測を行ったことで、文化財保全にあたって課題となる周辺環境の危険な要素を具体的に示すことができた。既存の道路閉塞推定手法は、個々の道路の閉塞状況の推定までは困難なものが多いため、詳細な道路閉塞状況が推定できる本手法は、既存手法を補うものといえる。さらに、京都市が歴史都市として持続していくためには欠くことのできない文化財と歴史ある街並みを保全するという視点を融合することで、震災時の救援可能性からみた文化財の危険性を明確に示すことが可能となった。

GISを用いた京都市における

子供への声かけ事案の空間分析

地理学専修 板東 秀行

〔はじめに〕 日本では、平成13年頃より地域住民による防犯活動が急速に普及してきた。これには、治安の悪化や子どもが被害者となる凶悪事件をめぐる報道が関連している。特に、子どもが被害者となる凶悪犯罪は、地域住民の体感治安の悪化に大きな影響を与えており、地域住民の防犯活動の取り組みにおいて、子どもの安全確保が重要視されている。しかし、こうした防犯活動に対する問題点も指摘されるようになり、中でも、不審者に対する防犯活動は、対象とすべき事案の定義付けや防犯活動の効果に関する実証が不十分である。このような批判から、これからの防犯活動には、科学的根拠をもとに実証性のある活動が期待されているといえる。

本研究では、現行の防犯活動に関する批判を踏まえて、子どもに対し声かけを行う不審者の事案（以下、声かけ事案）を不審者の行動形態に基づいて分類し、声かけ事案の定義付けを行う。さらに、声かけ事案の発生地点を、GISを用いて分析し、声かけ事案の類型に関連した発生地点の空間的特徴を明らかにする。

〔研究方法〕 研究対象地域は、警察や自治体と連携した地域住民による防犯活動が盛んに行われており、声かけ事案の資料も豊富である京都市を選定した。分析に使用した声かけ事案の資料は、京都府警のホームページで平成17年から19年に公開された五七二件の内、未遂などを除いた五三三件である。本研究では、五三三件の声かけ事案を分類し、類型ごとの発生地点と地域特性との関連性を明らかにするために、GISを用いてカーネル密度推定による事案発生分布図

を描くとともに、多重リングバッファを用いて施設立地地点と声かけ事案多発の空間的関連性を検討した。

【結果・考察】 子どもへの声かけ事案は、5行為に分類でき、この行為類型ごとに多発地域が異なることが分かった。また、声かけ事案は休日比べて、平日に発生しやすいことや子どもの下校時に集中して発生していることが判明した。声かけ事案の発生と地域特性との関連性については、コンビニエンスストア、街区公園の半径50mの範囲で声かけ事案が多発する傾向が確認された。しかし、本研究で扱った声かけ事案の資料は、町丁目単位までしか発生地点を特定できなかったことから、声かけ事案の発生と地域特性との詳細な関連性が十分に議論できなかった。特に、コンビニエンスストアと声かけ事案の発生との因果関係については、今後の研究で検討していかなければならない点である。しかし、従来、「子どもへの声かけ」としてまとめられてきた事案の内容は多様であり、本研究で得られた声かけ事案の類型別の発生時間および発生地点の空間的特徴は、これからの防犯活動を策定する上で基礎的な情報として有益なものと思われる。

近世の民俗行事・芸能からみた地域間の結合関係

—京都六斎念仏の歴史地理学的研究—

地理学専修 本多 健 一

六斎念仏とは、鉦や太鼓を鳴らし、時に踊りながら念仏を唱えて、死者の回向などをする民俗行事・芸能である。近世京都周辺におけるそれらの特徴は、近世後期に著しく芸能化したこと、京都市中を圍繞するようにして講中の組織された村落が分布していること、講中衆は定期的に社寺や京都市中に出向いて、六斎念仏を執行（しゅぎょう）していたこと（社寺での執行を「物詣」、市中などでの執行を「棚経」と呼ぶ）などがあげられる。

本稿は、主として歴史地理学的な立場から近世京都の六斎念仏を研究対象とし、その特徴的な移動行動および分布状況に焦点をあてて、六斎念仏の実態と変遷とを説明する。その上で、民俗行事・芸能を媒介とした、近世の都市と近郊村落との文化的な結合関係に関する新たな知見の獲得を目的とした。その結果・結論の概略は、以下の通りである。

まず六斎念仏講中の移動に関する行動論的アプローチでは、江戸前期には京都郊外の社寺で、祭礼や縁日にあわせて物詣が行われていたが、それらの担い手は限られた社近郷村落の農民であった。この形態が大きく変化した契機は、江戸中後期、公儀による個別鳴物規制の対象となるほど京都市中への棚経が盛んになり、その際に共通する「最終目的地」として洛東の清水寺が定まったことにある。清水寺における物詣は、市中棚経を兼ねて様々な方面から多数の講中が参集するものであり、多くの観客を前にしての講中同士の競演は、当時の六斎念仏の芸能化現象とも密接な関係を持っていた。これらは、従来の物詣とは異なる新しい行動形態Ⅱ「一山打」の成立といえよう。さらに幕末期には、

京都市中周縁の壬生寺や北野天満宮でも新たな一山打が確立し、それにあわせて市中棚経の機会も増加した。

次いで組織された講中に関する分布論的アプローチでは、江戸中後期から明治初期にかけて、京都から比較的遠隔の講中が消滅し、半径2里以内の近郊村落への集中化という現象が生じた。つまり行動・分布いずれの現象からも、江戸中後期から明治初期にかけて、六斎念仏が京都市中との関係を強めていることが明らかになった。

以上の現象が生じた理由としては、芸能化の進展や市中棚経の隆盛にともない、六斎念仏が娯楽および農間渡世としての性格を強めた結果、審美的な評価と対価を獲得しうる場所と機会として、京都市中との結びつきを従来以上に必要とするようになっていったからと考えられる。裏をかえせば、これは京都の近郊村落に対する文化的影響力、あるいは都市と近郊村落との文化的な結合関係の反映といえる。特に講中が半径2里以内の近郊村落に集中した現象は、都市の文化的影響力が「(地理的な要因による)文化事象の選択ないし淘汰」として顕現したものととらえられよう。また当時の京都では、都市と近郊村落との文化的な結合関係が強まる現象が、六斎念仏に限らず都市祭礼でも見られ、それらは近世後期における「行動文化」の普及・大衆化といった、より大きな社会史・文化史の流れの中に位置づけられよう。

大津絵と民芸運動——柳宗悦から片桐修三へ

総合人文学専修 石川 ちひろ

大津絵は、17世紀半ば、およそ江戸の寛永年間頃に、東海道の大津宿から京都へ向かう街道筋で生まれたみやげ絵である。明治になると、街道筋の衰退に伴って大津絵店は姿を消し、みやげ絵としての大津絵の歴史は幕を閉じるが、その画題はモチーフとして日本画や工芸製品のなかに生き続けた。また、昭和の半ば頃になると、地元大津の市民のなかに自ら大津絵を描く人々が現われ始め、やがて大津絵教室へと発展していく。

このような近代以降の大津絵の展開に対して、これまでの研究はあまり関心を示してこなかった。その背景には、柳宗悦の存在がある。民芸運動の創始者として知られる柳は、一連の運動のなかで大津絵を「民画」(＝民衆的絵画)と定義し、美的鑑賞の対象として新たに価値づけた。以後、柳の提示した大津絵論は広く浸透し、現在まで根強く踏襲されているが、それがゆえに、従来の大津絵研究はどうしても柳の理論の枠内から脱しきれない感が否めなかった。柳が大津絵論を著わしてからもうすぐ80年になるという今日、柳による大津絵の価値評価自体を見直す時期にきているのではないだろうか。

そのような問題意識のもと、本研究では柳の理論の再考を試みた。まず第1部では、柳以前から大津絵に多大な関心を寄せていた大阪の趣味家らの存在に着目する。彼らは、国内初の大津絵展覧会を開催するなど大津絵の世界では先駆的役割を果たした人々である。ここでは、こうした趣味家らの大津絵に対する見方と柳のそれとの比較から、柳の「民画」という見方がいかなる眼の規範であったのかを検討する。続く第2部では、地域で展開した大津絵をめぐる動きを考察する。その際に着目するのは、柳の弟子として終生大津絵の研究と振

興に携った片桐修三の存在である。片桐は常に地元の天津絵普及活動の中心に身を置いたが、彼の言葉を注意深く掬い上げていくと、柳の弟子として、また一方で天津の文化的発展を願う地元人として、非常にセンシティブな立場に置かれた人物であったことが伺える。

柳が天津絵の第一人者とされるゆえんは、天津絵を「民画」と価値づけた彼の眼の画期性にあった。そして、そのような見方は片桐を介して地元天津に定着していくが、柳の眼と地元の間で揺れ動く片桐の眼を介して地元で展開した多様な天津絵の側面を捉え直してみると、それが必ずしも「民画」の枠内で語られうるものばかりではないことが明らかとなる。そこから再び柳の理論を見つめ直し、「天津絵Ⅱ民画」の図式を突き崩したところに、今後の天津絵研究の展望が開けているに違いない。

外国語を通してみる『平家物語』のオノマトペ表現

総合人文学専修 清水 千香子

日本語のオノマトペを研究するためには、さまざまな音声で構成されたオノマトペを観察し、その音声構造と意味との対応を確かめるといふ帰納的な方法に頼る必要がある。本研究でもこの方法を用いながら日本語のオノマトペを観察するが、同時にオノマトペがどのような分析を受けて外国語翻訳のなかに受容されるのかを調査し、その結果を通して日本語オノマトペの特徴を考察することを試みる。日本語が外国語と向き合う場合、外国語が最も明確に他者として位置づけられるのは翻訳の世界においてであり、そこには「どうしても外国語にならない部分」が存在する。この「外国語にならない部分」を翻訳の限界を示すものとして否定的に捉えるのではなく、むしろ日本語の特質や日本語表現の独自性を知る手がかりとして活用する。そして、「外国語にならない部分」の一例であるオノマトペが翻訳のなかでどのように扱われるかを観察することで、オノマトペの持つ様々な特質に迫りたいと考える。

研究にあたって取り上げた文献は『平家物語』である。古典作品を選ぶことで臨時的で泡沫的な造語ではなく、時代を越えて観察できるオノマトペを研究の対象にすることができる。またテキストに選んだのは覚一本で、必要に応じて延慶本にも言及する。外国語訳として、覚一本を底本とするHelen Craig McCullough 訳 "The Tale of the Heike" と René Sieffert 訳 "Le Dit des Heike" を取り上げる。

本稿では、まず日本語オノマトペの特徴について概観し、その研究の歴史に触れながら、オノマトペが早くから外国語を母語とする人々の関心を集めていたことを述べる。さらに古典作品におけるオノマトペの特徴を整理したうえで、

『平家物語』に頻出する二音節型オノマトペ数語（「ツツと」「ザツと」等）と二音節反復型の「サメザメと」「ハラハラと」を中心に考察を進め、これらのオノマトペが特定の語と結びついて定型表現を作ること明らかにする。（例「ときをドツとつくる」「ムズとつかんでドウと落つ」）また、『平家物語』のオノマトペが単に動作の様態を説明するだけでなく、condensation（凝縮性）を持った語彙として物語の内容に深く関わる複雑な情報を伝える力があることも、原典と外国語訳の双方を通して指摘する。

「建築家」としてのアーティスト

——曾根裕が磯崎新から継承した問題に着目して

総合人文学専修 田中 久美子

現今の現代美術は、平面や立体、写真、ビデオ、パフォーマンスなど多様な素材を媒体に、具象や抽象、美術史、日常に反乱する記号、サブカルチュアなどのイメージを使用し、多岐にわたる作品が制作されている。それらの美術を日本という文脈のなかで評価した代表的な言説として、榎木野衣と松井みどりの概念があげられる。

榎木の言説は、日本の現代美術に独自の歴史観を付与することによって、西洋美術から自立しえる道を築いたといえるが、その言説で評価される作家は、あまりにも東洋趣味的な表象を作品に投影する。松井の言説は、そのような「日本」を表象しない作家を評価するが、榎木の提示した言説を再び忘却し、西洋に依拠する美術概念であった。この両者の言説は、互いに欠落する部分を補完しているが、共有しているはずの「日本」を定義する概念が、決定的に異なるために、互いの言説を否定することでしか成立しえない。しかし、そうであるならば、今後の日本における現代美術が歩む道は、両極な道しか存在せず、どう歩もうと至難を極めることが予想される。そうならないためにも、両者の言説を横断するような作家の存在が、今後の日本における現代美術にとって重要となってくるのではないだろうか。

曾根裕は、その両者の言説を横断する可能性のある作家といえる。曾根は、大学時代に建築を学ぶが、卒業後に制作を行なうために選んだ場所は、美術であった。しかし、美術家として評価が定まりつつある現在でも、曾根は、建築家になるという発言を繰り返している。この矛盾に満ちた発言は、何を意味す

るのだろうか。曾根が美術の領域で制作を行なうことを決めたのは、学生時代であった。その学生時代には、磯崎新の建築事務所スタッフとなり働いている。それにも関わらず、いや、そうであるからこそ、通常の道を歩むことなく、美術の領域で制作を行なわざるを得なかった理由があるのではないだろうか。磯崎は、従来から西欧的な建築概念に疑問を持ち、日本の都市空間や建築概念を提示している。その歴史観は、榎木と同様に、自明とされてきた建築という概念を解体した上で、日本における建築について考察を行なってきた人物である。その磯崎の影響が、曾根にあったと考えるのであれば、「美術家」ではなく、「建築家」としての曾根に焦点をあてることによって、榎木が提示した歴史観を内包する作家であることを浮かび上がらせることが出来るのではないかと考える。

榎木、松井の両者における有効的な概念を複合するような曾根の存在は、榎木の提示した、西洋に依拠することのない自立した日本現代美術に多角的な視点をもたらし、新たな日本の文脈を示唆することにつながると考える。

エミール・ノルデにおけるプリミティヴィズム

——その土着性と表象

一二六

総合人文学専修 島 雄 豊

本稿はドイツ表現主義画家エミール・ノルデ（一八六七—一九五六）について、彼のプリミティヴィズムにまつわるそれぞれが齟齬をきたしながらも連関している要素が、彼の造形面にいかに影響しているのかを彼の行動や言説、作品の検証を通じて考察するものである。プリミティヴィズムとは西洋の非西洋に対する認識として、人間の最善の状態はその原初の状態であるという理念である。序章において、近代美術におけるプリミティヴィズムは原始社会の造形物を芸術と見なし、それをモチーフとした作品を制作することに対して用いられることを確認した。ノルデのプリミティヴィズムの場合、特徴的なのはそれが造形面よりも言説などのイデオロギー面において表れていることである。第1章では、ノルデのイデオロギー的プリミティヴィズムの表出として、彼の原始社会に対する態度を検証した。当初彼の原始社会についての言説は一九一三—一九一四年にかけて参加したニューギニアへの調査旅行を機に噴出したと推測したが、検証の結果旅行以前から原始社会をモチーフとした作品を制作していた。この事は思想面にも及び、原始社会への深い共感と理解され、その後の帝国主義や文明社会に対するノルデの告発的表現は、この共感に裏打ちされている。第2章ではノルデのプリミティヴィズムに関わるもう一つの側面である、ナチスとの近接に関わる問題について考察した。ナチスとノルデは共に都会を否定と近代への疑念、終末論的期待、純血性の重視という点で共通していたが、両者が結果的に相容れなかったのは芸術によって民衆に理想的ドイツ像を提示しようとした、ナチス独特の芸術観のためであった。第3章ではナチスへの近

接にもつながるノルデのナシヨナリストイックな性格とその造形面への影響を検証した。故郷北シユレースヴィヒ地方に生涯定住する中で培われたノルデの強烈な郷土への帰属意識は、彼の芸術哲学である「根源的なもの志向」へと派生し、超越的なものの表現に至る。そうした内的な精神や感情を喚起する絵画言語は色彩の陶酔と異形のフォルムであり、その色彩による原初的ヴィジョンを最もよく表しているのが水彩画である。ノルデは吸水性のある和紙に水分を含んだ色彩を偶発的に滲ませる独自の水彩技法を確立したが、特に風景画は他のどのジャンルにも増してモチーフの溶解が進んでおり、彼の最も先鋭的な根源性の表象である。この特性はノルデの精神的土壌が故郷の自然に深く根付いていることを表し、その超越的な印象と色彩の陶酔は彼のナチス的な要素を裏切っている。結論として、ノルデのプリミティヴィズムは北シユレースヴィヒへの帰属意識と根源的なもの志向に根ざしており、ノルデの水彩の風景画が表象している超越的な印象と色彩の陶酔こそ、彼の根源的なもの超越性を我々の感覚に鮮烈に訴えかけてくるといえる。

「月」と「夜汽車」のモティーフを追って

―チエーザレ・パヴェーゼ『月と篝火』における「アメリカ」再考―

総合人文学専修 中島 梓

修士論文では、イタリア人作家チエーザレ・パヴェーゼ（一九〇八―一九五〇）の最後の長編小説『月と篝火』を基本テクストとして取り上げた。本作品では、孤児である主人公が「アメリカ」へと渡ったのち、ときを経てふたたび幼少期を過ごした村へと戻り、そこに自身の「故郷」を見出す様子が描かれている。「アメリカ」は人々が根を下ろすことのできない場所として、いっぽうの「故郷」が人々の根ざす場所として描かれていることから、従来、この物語の主要舞台となっている「アメリカ」と「故郷」のふたつの土地は、それぞれまったく性質の異なる場所と考えられてきた。

しかし、本作品第6章には「アメリカ」と「故郷」をともに回帰的な世界観のもとで語る一節がある。この箇所は従来の解釈のみに頼るかぎり、不可解と言わざるを得ない。

そこで、『月と篝火』において「アメリカ」を舞台とする章を再考した。とくに主人公がアメリカの荒野で過ごした夜の場面に登場する「夜汽車」と「月」の描写に着目し、他作品にも目を配って検討を行った結果、パヴェーゼ作品のなかでは「夜汽車」が孤独と郷愁のモティーフであること、そして「月」が神話的世界と結びついていることを明らかにした。

さらに、「月」が神話的世界と結びついているという結果をふまえてふたたび『月と篝火』に目をむけたところ、「故郷」で主人公が過去の自分の姿を重ねるチント少年の目にする火事、「篝火」の情景と、かつて「アメリカ」で主人公が眺めた「月」の情景の描写が類似していることを見出した。

このことから『月と篝火』のなかで「アメリカ」と「故郷」は、互いにまったく相対する性質を担う場所として描かれながら、それと同時に神話的枠組や回帰的な時間の流れに支配された場所として描かれていること、また、本品では巧みな物語構成によって、そうした神話的枠組みや回帰的な時間の流れが過去も現在も世界中で連綿と繰り返られている様子について描き出されているということを、論文のなかで明らかにした。

On the Poetry of Sylvia Plath: Psycho-Analytical Explorations of Four Texts

教育人間学専修 Yukiko Kashiwara

This study looks at four poems written by an American modern poet, Sylvia Plath (1932-1963). In this paper, “Fever 103”, “Ariel”, “Nick and the Candlestick” and “Words” are analyzed from a viewpoint of dream analysis. In general, Plath’s works have the tendency to be regarded as if they were feminist poetry. Previous studies show her works rose from her personal life. However, this paper proves that the source of deep emotion was her inner psychic reality which she must have experienced. By a series of psychoanalytical explorations of her poems, we will find new aspects of value of her poems, and at the same time, it will be revealed that one’s life is not unique but has various inner layers of life no matter how little one is aware of it.

The researcher thinks true emotion is not within the poems themselves but they are still living under the surface of her works. To highlight her “unspoken words”, it is efficient to adopt the viewpoint of dream analysis. According to Rycroft, dreams as well as poetry are imaginative creative activity of a person’s unconsciousness. That is to say, it is possible to analyze poetry by using the same method for dream analysis.

In the first chapter “Fever103” is discussed. Plath recognizes she has a foreign object in her body. This object expressed in forms of invisible and mortal germs stands for sin to her. The title shows her tragic wish, longing to be burned to be cleaned.

In the second chapter, “Ariel” is discussed. The researcher considers that there is a vital longing for living common to universal humankind. In this chapter, with the issues from the previous research, the reconsideration of “Ariel” and her inner movement are explored.

In the third chapter, “Nick and the Candlestick” is discussed. This poem seems to be composed about her second infant named Nick. However, it shows her inner dynamic transformation describing the very moment her two minds are united with the metaphor of a limestone cave and Jesus Christ.

In the fourth chapter, “Words” is discussed concerning the vital power of words. The researcher will discuss words that give power through the belief of the speaker, so that the spoken message will be actualised.

Through her four poems, three main findings are derived. The researcher has found that the poems of Plath reach the depth of the vital energy, that she longed for a sense of reality and that her life went backward.